



TEL 076-611-5155
FAX 076-611-5150
E-mail info@krisshouten.com

平成十七年十月二十日
〒九三二〇八〇四
高岡市問屋町四十
有限会社 沖商店発
2015.10.20

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょうか』『そんな人生の根本的問題を皆様と一緒に考えたい』と思ひ、皆様の心に一石を投じて、意見を頂く機会になることを願って本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚の無い意見を寄せてくださいませ。様お願い申し上げます。

一 原油高騰と価値の交代、そして省エネ運動

原油高騰で石油製品が軒並み値上げになりました。私どもの扱っている商品の中でも、石油を原料とした化学繊維製品(ニール・ナイロン・エステルなど)においては、メーカーからの値上げの案内がひっきりなしに届いています。その割には売価が上がらず、経営者にとっては愈々、天の試練が厳しくなってきた感があります。即ち、如何にして生き残るかという生存競争の篩に架けられている今日の経営環境の中で、今回の石油製品の原料高・製品安の状況は、いやがうえにも経営者の手腕を問われているのだと思つています。私は、この世の中は絶対的ではないと思つています。アインシュタインの「相対性原理」ではありませんが、凡て相対的・比較的なものであり、同じものでも時代によって価値観が異なってくるものだと思います。

例えば、バナナと鶏卵ですが、わたくしが小学生のころはこのふたつとも食料としては最高級品でした。鶏卵については、風邪を引き食欲が無く、体力の回復が必要なのに何も口にはいらぬ時、お粥に生卵を混ぜて頂いたとか、運動会の当日の朝、生卵を吞ませて貰ったとか以外に、平素口にした覚えがありません。バナナにおいては、いわゆる『バナナの安売り』で有名な価格下落まで、パイナップルとならぶ最高級果物で、私どもでは口にするには出来ない物でした。それが今や物価の優等生と言われるくらい他の物に比べ安価になりました。

また私どもの扱っている繊維および繊維製品も同様であります。繊維は、戦後、食糧事情が落ち着いた後の経済上において花形商品であり、今日から見て他の物と比べて格段に価格が高かつた様に思ひます。人間が生きて行く上での必需品として『衣・食・住』と言いますが、私はその第一番は『食』だと思ひます。何であろうと「自己保存・子孫繁栄」の二大本能に動かされた食糧確保が第一であり、それが不足した時代では、今現在何十万円もする着物と米一升が交換されていたとか、子どもの食料を得るために体を売る母親もいたとかという話を聞かされた

ましたが、終戦直後はそんなこともあったと思ひます。食料が最低なりとも何とか確保されますと、次は『衣』です。私が高校を卒業し直ぐに家業の沖商店へ入社したのは昭和三十五年、(昭和二十年・昭和三十五年の沖商店の盛衰は凄まじいものだったと聞いていますがそれについては別途しましょう)当時、沖商店では婦人児供服地の主材料は毛織物でした。当時の婦人児供服地の主材料は毛織物でした。素材(純毛とか化繊混紡とか)、色柄により価格は各々でしたが、毛織物の価格の基準として最も基準となるものは、毛紡績トップの日本毛織(株)が公共制限向けに大量に生産していた現在もしている生地、ニツケ四〇〇番紺サージ(ワール一〇〇%)だと思ひますので、その価格で話を進めて行きます。ニツケ四〇〇番は当時m@1800円ほどでした。今現在はm@2500円ほどです。これを見ても如何に過去の価格が高く、それに比べ、現在の価格が他の物価に比べて上がっていないかということが解ります。

この鶏卵、バナナ、繊維などにかぎらず挙げれば限りが無いほど多くの物が、その時代その地域その事情によって価値観が異うのはご承知の通りです。少し以前までは日本においては水と空気は無料でしたが、汚染が進みだんだんと有料化しています。この度の原油価格高騰においても、時代の流れによる価値の移行と捉え、原油の価格が上がったのではなく、むしろ、今まで安く買っていたのだと考え、価格が上がった今、それなりに対処して行くより仕方がないのではないかと思ひます。

とはいえ、石油製品が急にならぶから給料も急にならぶわけではなく、しばらくは耐え忍ばなくてはなりません。それで急激な変化に対応するテクニクが必要となるわけですが、その一端として、先日、ガンリン節約ならびに地球温暖化防止に役立つ『省エネ運転』と題した自動車の運転方法を、テレビで紹介・放映していただきましたので、ここで私流の『省エネ運転』を紹介したいと思います。

『我慢じゃありませんか』と言う言葉の後は必ずと言っていいほど自慢話が出てきます。以後の話も私の自慢話ですからその積りでお読みください。私が自動車運転免許書を獲得したのは高校卒業した昭和三十五年四月九日付けです。当時満十八歳からでない自動車運転免許書が許可されませんでしたから、昭和十七年三月三十一日生まれの私は満十八歳から経ること九日後に交付を受けたわけで、許可資格者中、最年少の獲得者と言えるでしょう。

当時の自動車は今日ほど完成していませんので、少々の故障は自分で直す技術も知らなければなりません。従って学科科目は、構造(自動車の構造と簡単な修理の方法の学習)と法規(道路交通法)の二種類を勉強させられ、その上での実地試験でした。この時の実地試験が今日の『省エネ運転』そのものだと思ひ思ふのです。その基本は『なるべくブレーキを踏まない運転』でした。

私たちは『なるべくブレーキを踏まない運転』をしなさいと教えられました。当時は舗装された道路は少なく、多くは砂利敷きの道路でした。砂利敷きの道路では急発進、急ブレーキは砂利で滑って舗装された道路ほど急発進、急ブレーキの効果がありません。それで、交通事故防止の上からもガンリンの無駄使い防止の上からも、急発進、急ブレーキは下手な運転とされてきました。ですから今でも私は自動車急発進させるとはならず、咄嗟の時でない限り急ブレーキはかけません。

先日、私が、或る角を曲がると三百メートル程先の交差点の信号機が黄色から赤に変わったところでした。私は、その時の自分の車の速度からその交差点までエンジンに更なる蒸すことなく行けることを見通し、ギヤをニュートラルにして進みました。(この時必ずブレーキペダルの上に足を架けていつでも止まれるようにしておきます)そこへ後ろから猛スピードで私の車を追い抜いて行く車がありました。その車は交差点の赤信号に引掛かり急ブレーキをかけて止まりました。その側へ数秒後、私の車が静かに到着しました。やがて、信号が青に変わりました。両車同時にスタートしました。前方の信号を見ると運の悪いことに、また、黄色から赤に変わったところでした。私は、自分の車がその交差点まで更に蒸す

となく行ける速度になるまでエンジンを蒸し、その後はギヤをニュートラルにして進みました。彼の車は停車しなければならぬことを分かっていたいながら猛スピードで突進して行き、交差点前で急停車しました。そしてまたその側へ数秒後、私の車が静かに到着しました。私は「おまへ何を考えて(計算)して車の運転しているのか」と言うような顔で横を見ました。彼は嫌な顔をしてうそぶきました。青信号になるや否や彼はタイヤを軋ませ、車を急発進させて遠ざかって行きました。この彼の運転こそ『浪費・乱費運転』そのものです。

でもこの私の『省エネ運転』はそんなに簡単に出来るものではありません。常に周りに注意し、状況を把握しなければなりません。赤信号までの距離と現在の自分の車の速度との調和、後・横から割り込みする車の有無の確認など心配りをしながら運転する必要があります。そうして、最少のガンリン消費での運転を心掛けるのです。ブレーキをかけるという事は、折角ガンリンを燃やして得た前進エネルギーを消す行為です。しかも、タイヤの消耗というおまけまで付けて、障害物が無い交差点では私は左折・右折の際、なるべくブレーキを踏まないように心がけています。この様に、ガンリンもタイヤもその消耗を少しでも無駄の無いように、最大限に發揮させようとする運転が私の『省エネ運転』です。

只、今日の『省エネ運転』の中でひとつだけ、し難い動作があります。それは、『アイドリングストップ運動』です。私が運転を習った時代は、車の性能が今日ほど良くはなく、バッテリーもプラグも、性能が悪くなったものも大切に使用して使ったので、一度エンジンを切ると、次のスターター動作でエンジンがかかり難く、そのうちバッテリーがあがるということも珍しくありませんでした。それで道路走行中にエンジンを切るなどと言う行為は考えられませんでした。「車は目的地に到着するまでエンジンを切るべきではない」と考えていました。今は機器の性能が良くなって、こまめにエンジンを切っても機械に損傷が無く、むしろ、一酸化炭素ガスの発生を抑制に役立つと聞き、そうするよう心掛けたと思ひます。ここにも時代による価値観の違いを、強く知らされる思いを感ずります。

個人メールE-mail 062525@krisshouten.com
有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘